



国境なき子どもたち (KnK)

インド南東部、スマトラ沖地震・津波で被災した
青少年に対するビデオワークショップ
(2005年8月－9月)

実施報告書

報告者
オペレーション・ディレクター 清水 匡
(2006年3月7日)

国境なき子どもたち インド ビデオワークショップ 2005

あの津波を忘れない

開催期間：2005年8月20日～9月10日

対象者：タミルナドゥ州ビランガニ KnKホームの青少年（男子5人 女子6人）
年齢 12歳～16歳

実施日程および実施内容：

初日

計11名の参加者。年齢は12歳から16歳までと幅がある。全員ビデオカメラを触るのが初めてであった。まずはカメラに触れ実際に使わせて機材に慣れ親しみ興味を持たせることにした。友達が画面に映るのがよほどうれしいのか、とてもはしゃいでいた。



2日目～4日目 カメラの撮影技術を勉強

まだ2日目とあってカメラを持つと興奮してしまい、こちらが教えたことを忘れてしまう様子。自分たちが撮影したものを見直してどこが悪いのかを反省しながら進めた。年少の子どもや女の子には少し難しうである。男の子は元々機械に興味があるせいか飲み込みが早い。カメラの練習なのに自分が写りたがってしまう女の子もいる。また、三脚の使い方も勉強した。

5日目-6日目 マイクの使い方と班分け

どの国の子どももマイクを握ると歌いだす。そして、各自がそれぞれインタビューを始める。インドネシアのワークショップではアシスタント係を設けたがどうしても補佐的な係になってしまうことと音なしの映像があったため、代わりにサウンド係を設けることにした。そのほかディレクター係、カメラマン係と3つの係をもうけ各自担当を決めた。やはり男の子がカメラをいじりたがるのはどこの国でも同じようだ。結局、地味目なサウンド係などは年下の控えめな女の子がやることになった。

明日とあさってビランガニの町の子を撮影することになったため、どのシーンを撮るかを話し合った。ビランガニは基督教の町なので教会ははずせない。そのほか、学校、バスターミナル、マーケットなどを紹介することになった。また、津波がテーマなので、海岸付近の被災地も撮影予定に組み込んだ。そのほか、避難キャンプも撮影し、できればインタビューもと考えている。撮影のテーマを決めたら、撮影のイメージを絵コンテに描いた。



7日目-8日目 屋外にて撮影

今回のビデオワークショップで初めて屋外に出て撮影を行った。家の中で練習しているのと違い、本番は緊張と興奮で教えられたことをすっかり忘れてしまい、なかなか思うように撮影できない班が目立った。また、自分の担当を忘れてしまい、ボーッとしていたり、監督係なのに自分が撮影していたり。最初はなれることが肝腎なので長い目で見ることにする。



先日の撮影分を考察。反省点を確認して、津波被災地と避難キャンプを撮影。28日からのフェスティバルでビーチには人がたくさん来ており、泳いでいる人もいた。ビデオチームに海岸に来ることは怖くないかとたずねると、男の子は平気だと答えたが、女の子は少し怖いという子もいた。半壊した家を撮影中のマニラン。彼が今撮影しているのは自分の家だそうだ。「壊れた家を撮影するのは辛いけど、ここで何があったかを記録したいんだ。」と答えてくれた。

9日目ー11日目 作品作り、インタビュー



津波というテーマを元に具体的なストーリーを考えていく。今回は津波で母親を亡くした少女（15歳）スンドラバリに焦点を当てることになった。スンドラバリの経験を絵や劇などを織り交ぜ作品を作っていく。そのほか彼女の普段の生活やインタビューなども撮影することにした。またいつものごとく、絵コンテを作成し、コンテに沿って撮影ができるようにする。また、スンドラバリのインタビューを行った。

インタビュアーは監督系のシアマラデビ(14歳)。彼女は津波の1週間前に母親を癌で亡くしており、悲しみの矢先に津波が残された家族を襲った。自分と同じく母親を亡くしたスンドラバリの話を聞いてシアマラデビも涙ぐむこともあった。

12日目ー13日目 体験を絵で表現

スンドラバリのインタビューを元に再現の絵をみなで描いた。どうも撮影するときは元気がいいが、それ以外の作業は乗り気になれないらしい。最もそれが当然だが進めていくうちにこういった作業の大切さを理解してもらえばいい。そしてスンドラバリの日常生活を演じてもらい撮影。一通り撮影が終了した後、みなで集まり自分たちの津波の体験をお互いに質問しあった。皆、数人の過去を把握はしているがそれぞれの体験を深くまでは話していないため、経験を共有するといく機会を設けた。



14日目ー17日目 ラストのメッセージ



8割の撮影が終了したところで今まで撮影した分を見直した。作品を完成させるうえで足りないと思われる部分をもう一度話し合い撮影し、KnKホームでの生活をレポーターが紹介するという形をとった。そして、ビデオの最後のシーンで使用する部分を撮影。そこにはビデオを見る人へのメッセージがこめられ、スタッフを紹介して終

3

わるという設定となった。そのメッセージには、津波で被災した人々の悲しみと、このような災害が二度とないように祈り、一日では早く悲しみを忘れることができるようにとの気持ちが込められている。

18日目-19日目 編集～完成

撮影したものをこちらで編集し、それを元に皆の意見を聞いた。足りないと思われるカットを追加撮影し、全員で考えたナレーションを映像にはまるように調節していく。

あらすじ



2004年12月26日。M9の大地震と史上最大ともいわれる津波がスマトラ島沖で発生した。各地での死者・行方不明者は22万人にも及びその三分の一は未成年者といわれている。インドのタミルナドゥ州では10,000人を超える犠牲者が出た。国境なき子どもたちは翌年1月に津波で被災した子どもたちを受け入れる施設KnKホームを開設した。

KnKホームには46人の子どもたちが家族同様に生活しており、その生活を子ども自身がレポートし紹介する。そして、津波で母親を亡くし今でも時おり母親の写真を見ては涙ぐむスンドラバリに焦点を当て、彼女の話を中心に津波の時の状況を説明する。

スンドラバリの母親は浜辺で魚売りの商売をしていた。あの日もいつもと同じように魚を売っていた矢先の出来事だった。スンドラバリも波にさらわれまいと必死にヤシの木にしがみつき九死に一生を得る。その後スンドラバリは必死に母親を探す但她が母親と再会することはなかった。父親は一人で子どもたちを養うことができないため、スンドラバリがKnKホームに来ることになった。KnKホームでは自分と同じ環境の子どもたちがたくさんいて、少しずつ笑顔が増えていった。

ビデオワークショップを終えて

インドと比較するとアチェでの被害は比べ物にならないくらいにすさまじい。しかし、子どもたち一人一人の心の傷は被害の大きさと比例することはできない。KnK ホームで生活していく中でここがひとつの家族のような存在となり子どもたちそれぞれに安心感をもたらしている。一方、将来的な話になると彼らの表情は暗くなる。それは子どもたちの家族の問題が複雑だからだ。一般的に



子どもたちは津波で家族を失った津波孤児として認識されている。しかし、KnK ホームの子どもたちは津波以前から家庭に問題があり、津波が追い討ちをかけた状況となっている。ビデオワークショップに参加することにより被災者である自分たちを客観的に見ることができ、こうした問題に向き合うきっかけとなったように思う。これまで自分たちが津波の被害にあったことを『不公平』と感じていた彼らだが、ビデオワークショップで自分たちの体験を語ることにより、『生きていて良かった』という気持ちに変化していった。自分だけが辛い思いをしているわけではないことを再認識し、仲間が苦しんでいるときに慰め合い、お互いが一番の理解者になれることに気付いたのではないだろうか。